

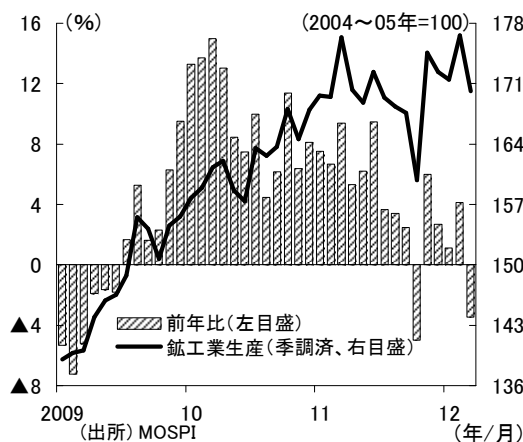


インドの3月鉱工業生産が弱含み

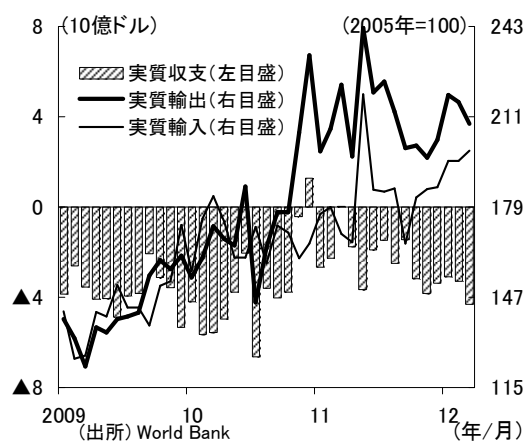
～ 春以降、増勢回復へ ～

- (1) 本年3月、インドの鉱工業生産が弱含み（図表1）。本年2月と比較すると、前年比で+4.1%から▲3.5%、季節調整済みでは前月比+3.0%から▲3.6%。産業別にも、繊維から鉄鋼、機械機器まで総じてマイナス。
- (2) しかし最終需要は堅調。まず外需をみると、輸出数量は昨年春以降、減少に転じたものの、昨年11月をボトムに増勢転換（図表2）。景気好転を映じて輸入数量も昨年末以降、再び力強い増勢に。輸出数量の増勢加速はルピー安が主因。対ドル相場は昨年9月以降、それまでの1ドル45ルピー前後のレンジから外れ、本年5月には54ルピー弱へ。
- (3) 一方、内需をみると、所得雇用環境の改善を映じて個人消費は好調持続。今後の鍵は設備投資。とりわけ外資流入が焦点。対内直接投資は全体として引き続き高水準で推移するなか、昨年に入り従来と異なる動き（図表3）。すなわち投資分野が、従来のサービス業やホテル不動産、ソフトウェアなど第三次産業中心から一転、製造業中心へ。業種別には金属や機械に加え医薬品が大幅増。
- (4) 外資の投資構造の変化はインド国内のインフラ整備進捗が起点。従来発電量が需要に追い付かず、電力制約が投資盛り上がり冷や水。しかし、長年に亘るインフラ整備に向けた積極的取り組みの結果、昨年半ば以降、発電容量の増勢加速（図表4）。本年に入り一段と増勢に拍車。エリア別にみると、発電設備の拡充は従来、西部を中心に北南部が続き、東部は取り残される展開。しかし、昨年半ば以降では東部の増勢も他エリアに比肩。道路や港湾など物流インフラ整備も進展。さらに本年3月実績の弱含みには祭日が昨年比1日多かったとの暦要因も。以上を要すれば、鉱工業生産のマイナス過大視は不要。今後、力強い増勢に復帰する公算大。

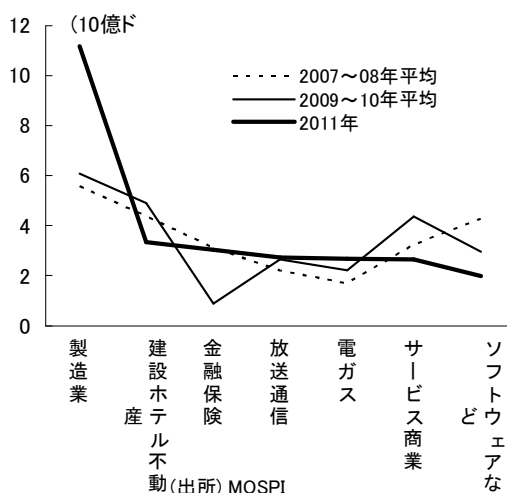
（図表1）インドの鉱工業生産



（図表2）実質輸出入と実質貿易収支



（図表3）分野別対内直接投資



（図表4）発電容量

